

特集

小児外科，小児泌尿器疾患の治療に 結びつける画像診断－私はこうしている

*Diagnostic imaging for treatment of pediatric surgical
and urological condition—My approach*

特集を企画するにあたって

小林弘幸
順天堂大学小児外科

Hiroyuki Kobayashi
Department of Pediatric Surgery, Juntendo University School of Medicine

今回は、小児外科，小児泌尿器疾患の治療に結びつける画像診断の最近の進歩と限界について－私はこうしている－ということで各分野でご経験の多い先生方に論じて頂くこととした。

テーマとしては、1) 鎖肛－腹腔鏡補助下結腸プルスルーにおける術中内視鏡超音波の有用性、2) 小児肝移植前後の画像診断、3) 胆道拡張症の画像診断；小児におけるMRCPの臨床的意義、4) 画像診断に基づいた小児泌尿器疾患における手術適応の決定、について取り上げさせて頂いた。

その理由について簡単に述べさせて頂くと、1) のテーマに関しては、鎖肛の根治術の際に、如何にプルスルーする腸管を肛門括約筋群の中心に通すことができるかを、術中内視鏡超音波を応用することによってその有用性について述べて頂いた。小児外科医にとっては、プルスルーする腸管を如何に肛門括約筋群の中心に通すかは永遠のテーマであり、今回、術中内視鏡超音波を世界で初めて応用した根拠と過程を詳細に述べて頂くことにより、解剖学的に肛門括約筋群を理解できるよう、順天堂大学小児外科の古賀寛之先生にお願いした。

2) のテーマに関しては、近年、生体肝移植の普及は、めざましいものがあり、長期生存例が多く報告されてきている。しかしながら、最近の画像診断の発達とともに、それがどのように応用されているのかは、肝移植を施行していない施設にとって未知の領域である。そこで、小

児肝移植施設として京都大学に次ぐ経験のある、自治医科大学小児外科・移植外科の水田耕一先生に、わかりやすく、移植前、移植後（早期）、移植後（長期）の画像診断の意義についてご報告頂いた。

3) のテーマに関しては、MRCPが普及して早10年近く経過しているが、特に小児疾患領域、特に胆道拡張症、合流異常症については、画期的なものとして一世を風靡した感があるが、未だ問題点は多く、今回は特に、胆道拡張症におけるMRCPの適応、限界について国立成育医療センター外科の黒田達夫先生にまとめて頂くこととした。

4) のテーマに関しては、小児泌尿器疾患のなかでも、先天性水腎症と膀胱尿管逆流現象については、手術適応について議論の多いところである。特に最近の医療情勢における、セカンドオピニオンの必要性において最も大切な分野、疾患であることは周知の事実であり、それでいて、あまり小児医療従事者に浸透していないというのが現状である。

そこで、今回、この難しいテーマについて、そのジレンマを含め、順天堂大学浦安病院小児科の金子一成先生に手術適応の決定をいかに行っているかを述べて頂くこととした。

今回のこの特集を通じて、画像診断の発達だけでなく、その問題点や未だ解決していない問題点についての現状をご理解頂き、多くの会員諸兄の日常診療においてお役立てば幸甚である。